菊の会だより

Kikunokai

〝心を踊る〟

■

菊の会は古典舞踊の
研鑽に励み
明日の新しい舞台芸術の創造に
情熱を燃やしています

［発行］
舞踊集団　菊の会
代表　畑　道代
〒161 東京都新宿区西落合2-21-23
電話　03-5983-6001(代)

舞踊劇「阿国かぶき」

新年明けまして お目出とうございます

舞踊集団　菊の会
代表　畑　道代

昨年は、一方ならずお世話になりました。まだ寒かった三月十七日、長い間お世話になりました渋谷の初台からこの新宿西落合に引越しをし、あわただしい中に一切の行事を無事盛会に終え、新年を迎える事が出来ました。

これも偏に、日頃御支援下さいます皆様のお蔭と感謝の思いで一杯です。本当に有難うございます。

まず、一月十六日の踊りぞめを皮切りに、中野杉並の子供教室の誕生、中国南京での公演、三月、五月、九月、十二月のアトリエ公演、四月の友の会総会、十月～十一月の秋の自主公演と一同心を合わせ頑張って参りますので今年も何卒よろしくお願い申し上げます。

「菊の会」への年賀状

舞踊評論家
矢野　輝雄

昨年は、「菊の会」にとっては長年の懸案であった稽古場の移転を果たし、新作「出雲の阿国」の自主公演を大成功裡に、新しい年を迎えられた会の皆様の喜びはひとしおと存じます。

今年は「菊の会」がスタートして二十三年目に当たりますが、発足当時、紅顔の少年少女であった人達も、今では見事に成長し、それがぐっと舞台に厚みを加えているのを覚えます。

それにつけても思い出すのは、リーダーの畑道代さんが、若い人達をあずかっても、将来食って行けるのですかとたずねられると胸が痛むと昔語っておられたことです。少数の家元を例外として、日本舞踊の世界で果たして踊りだけで食って行ける人がどれほどいるでしょうか。言うまでもなく、舞台に立つだけでも大変なお金がかかる世界です。それが今ではどうでしょう。当時の若者たちが一人前の舞踊家として成長し、第一線に立って活躍しているのです。数多くの舞台に立つ幸せは舞踊家のみが知る幸せといえますが、それが「菊の会」にはあるのです。

「菊の会」二十余年の歴史は、この質問に対する畑さんと、その心意気に応えた集団の人達の熱意が協力して作り上げた回答ともいえましょう。

畑道代さんを中心に、伝統芸能の新しい時代を作り上げようと熱意に燃えている真摯な人達による「菊の会」には、新しい年も必ずや輝かしい未来が用意されているものと信じます。心からご健闘を祈ります。

各地の公演で好評！

長唄「水仙丹前」

区民芸術劇場 なかのZERO公演

中野区文化・スポーツ振興公社主催による区民芸術劇場が9月29日夜7時よりなかのZERO大ホールにおいて行われ、始めて菊の会を取り上げて頂いた。

今、人気のあるZEROホールで、又菊の会からも近いという事で随分前から話題になっていた。

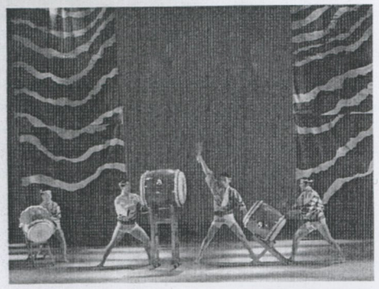
演目は「寿菊三番叟」杉昌郎作・演出による狂言舞踊「花冠者」長唄「水仙丹前」三隅治雄作・演出、畑道代振付による「海はるか日本を躍る」。総てにおいて完備された大舞台で存分に演じる事が出来た。

又、当日は台風との予報もはずれ、客足も良く盛会に終了した。

祝賀舞踊「寿菊三番叟」

待望の会津風雅堂で

福島県会津若松市に待望の劇場、会津風雅堂が完成し、8月30日に菊の会の公演を開催する事が出来た。一昨年に引き続き沢山の御後援を頂いた。会津若松市、福島テレビ、福島民報社、福島民友新聞社、ラジオ福島、会津日報の御後援を頂き、友の会の方々や八王子教室の皆さんの御甚力で盛大に行う事が出来た。



「海はるか日本を躍る」祝太鼓

中部民音公演

中部民音主催による「菊の会日本の心を踊る」の公演が9月20日岐阜市民会館、21日一宮市民会館といずれも夜6時半より行われた。何時もながら観客は満員の入りで、暖かい拍手に迎えられ、出演者も全力を込めて舞台を務めた。

茶房 舞むのご案内

昨年8月24日開店した茶房「舞む」も皆様の御愛顧を頂き新年を迎え、4日より開店。

定休日の火曜日以外は朝10時より夜9時（ラストオーダ8時半）まで営業しています。

冬のメニューとしてお鍋も始めましたのでどうぞよろしくお願いいたします。

友の会旅行会に参加して

～～～水上温泉～～～

中村　弘二

家内が菊の会にお世話になって三年目になり、初めて旅行会に出席するということを聞き、私も喜んで参加させていただきました。

行きのバスの中は、菊の会のメンバーはじめ、その方々を側面から支援している家族・友人が、笑顔いっぱいで自己紹介、カラオケなどで賑やかに花が咲き乱れました。

ホテル聚楽に着いて、風呂でひと汗を流したあと、舞台のある大広間でアトラクションがありました。今回参加させていただいた感謝の気持をこめて私が「昴」を精一杯歌わせていただきました。そのあと表舞台では見られない、講師の先生方のユーモア溢れる踊りや、「白浪五人男」はこれまた格調が高く素晴しいものでした。第二部のフィナーレは全員で「青い山脈」の大合唱。今回のクライマックスにふさわしく歓喜の歌声で感動的でした。初めて参加したにもかかわらず、あまりにも雰囲気が良かったために、調子に乗りすぎて皆様に御迷惑をおかけしたのではないかと心配しております。このように素晴しい体験をしたからには、来年も是非参加しなければ……と今から楽しみにしております。

この旅行会で感じたことは、暖かで気配りの細やかな畑代表を中心に、一糸乱れぬ団結の素晴しさでありました。菊の会のますますの発展を祈念するとともに、蔭ながら出来る限りの支援をさせていただきます。

佐竹永光さん、伊藤由香さんおめでとう

男性舞踊手の佐竹永光さんと伊藤由香さんが昨年12月18日、目出たく結婚式を挙げ菊の会スタジオで披露宴を行った。佐竹さんは中学一年から畑代表につき、今日まで男性のリーダーとして頑張って来た人。伊藤由香さんは岩手県から上京、虎ノ門病院を経て三宿病院の看護婦さんとして純粋に仕事に打ち込んで来られた方。当日は二百人以上の方が祝福に駆けつけて下さった。

友の会会員募集

伝統文化を大切に、明日の新しい舞台芸術の創造に情熱を燃やす菊の会の幅広い活動を支援するのが友の会です。

舞踊家の育成、作品創り、そして諸外国との文化交流を目ざす菊の会を育てる為に皆さんの御支援をお願いします。

一般会員、年一口一万円、法人会員、年一口五万円、詳しくは友の会事務局へ。TEL（03）5983－6001。

心をひきしめ感謝の思いを込めた新出発を！ 新しい時代へ、そして、創立25周年を目指し飛翔！

〝いまをただ一期と踊れ、いざやかぶかん〟創作舞踊劇「阿国かぶき」に感動の波！

鮮やかな「阿国かぶき」の出来栄え

演劇舞踊評論家　藤田洋

菊の会自主公演の新作舞踊劇「阿国かぶき」は、ちかごろにない力作で、充実した作品であった。阿国という女性は歌舞伎の創始者でありながら伝説に包まれているという点で、神秘的である。これまで、ずいぶんいろいろな阿国を見てきたが、いずれも伝説の人物にどのように血肉を通わせようかと苦心していた。今回の阿国は、慶長年間の無頼の徒（かぶき者と呼ばれた）をこらしめた名古屋山三が縁になって、阿国のややこ踊りからかぶき踊りへ変化していく過程が、無理なく構成されている。三隅治雄作・演出が、史実を踏まえながらじつに鮮やかに創作している。

舞踊劇「阿国かぶき」

舞踊劇「阿国かぶき」第六景　山三の死

畑道代の阿国が、奔放でありながら踊りにいちずな強さと健気さを、これも鮮やかに踊りぬいて見せてくれた。この役に賭けた情熱が、誠実に、実感をこめて伝わってきた。

菊の会のメンバーは、ほかの派とちがって男性群が高い水準の技量をもっている。今回は若柳雅彦が客演して、一座の伝介や権三郎らをリードしたこと。この山三の伝法なセリフやかぶき者たちに、現代との類似性を重ね合わせることができるわけだ。

つまり、作者の意図はあきらかに阿国を十七世紀の女芸人であると同時に、現代にもそこここにいる、芸術家の姿を二重構造として意識している。古い物語だけれども新しいという感動がうまれる所以（ゆえん）である。

最初と最後を菊の会の稽古場にして、阿国は畑道代がみた夢の出来事にしている。阿国は山三の亡きあと、その装束をつけて、夢まぼろしの「かぶき」を踊る。現実と非現実を行きかいながら、阿国の虚像を、鮮やかな実像へとかえてみせた。この踊りは、間違いなく平成六年のすぐれた収穫にあげられる。

舞踊劇「阿国かぶき」　第七景　夢幻や南無三宝

舞踊劇「阿国かぶき」　第八景　よみがえり

「阿国かぶき」を観て…

演劇舞踊作家・演劇舞踊評論家　長田午狂

久しぶりに菊の会が、新作品を発表上演した。演出を担当した作者（三隅治雄）が、二年を要して書きおろし、畑道代が構成・振付した大作『阿国かぶき』である。序景と終景は菊の会の稽古場で、阿国と山三の昔に思いを凝らしていた畑道代が、山三の幻影に伴なわれて行き、かくて本筋に入る。そして、阿国と山三を中心とする物語を展開したのち、稽古場でハッと我に返った畑が〝いまをただ一期と踊れ〟という言葉を胸に抱いて、踊るところで終っている。

その本筋は現代の稽古場から、慶長年間の往時にタイムスリップして、阿国と山三の出会いから始まり、かぶき踊りの創造から完成に至る過程が描かれていて、これに阿国一座の盛衰が織り込んである。勿論、ヤヤコ踊りや種々な舞踊が挿入されているが、このたびは、それ以上にドラマ性が強く、むしろ、だからこそ内容が重厚になっていると言える。しかし、演技も踊りも、常に統制のとれているグループなので、総てがスムーズに進展していた。但し、このようなドラマは動作を少し誇張したほうが、喜怒哀楽の表現に迫真味が加わると思う。殊に「楽屋」や「山三の死」の景は、セリフが単なる説明にならぬためにも、演技に深刻さが必要である。

畑道代の阿国は心身ともに、阿国に成りきっており、若柳雅彦の名古屋山三も、菊の会の風趣によく溶け込んでいた。あえて言えば二人の恋情、芸の上の争い、再会のくだりなどを、もっと印象深く、じっくりと演じてほしかったが、上演所用時間の関係で、あの程度にとどめたものと思われる。いずれにしても、史実に乏しい伝説の二人の人物像を作りあげ、誰にも解りやすいドラマに仕立てた作者の苦労が推察される。また優れた作曲（田中利光）による音楽の効果も、忘れてはならない。とにかく『阿国かぶき』は、菊の会にとって異色の花も実もある演目であった。

一体感の共感を呼んだアトリエ公演

才一回目は4月16日から4日間、近隣の方々をお招きして行われた。演目は「寿菊三番叟」「若き鬼たちの讃歌」「四季に舞う」。

義太夫「延年三番叟」

7月21日から24日まで「飛翔」を中心に若手メンバーによる三隅治雄作・演出「津軽はるあき」が爽やかに行われた。

10月には長唄「二人猩々」北條秀司作「おこんの初恋」を開催、北條作品の温もりを沢山の方々が楽しんで下さった。

最後に12月24日、25日と助師10名、若手メンバーの一年間の成果を問う発表会が行われた。演目は「寿菊三番叟」「連獅子」「ふるさと囃子」若さ溢れる舞台で閉幕。

舞踊劇「おこんの初恋」

次いで5月6日から3日間、友の会会員や各地の教室の方々をお迎えして行われた。演目は「延年三番叟」「神田祭」「菖蒲浴衣」、地方には芳村伊四郎、杵屋栄敏郎、藤舎呂船社中をお迎えして畑代表が踊り、最後に「おはこ民謡集」と充実した舞台となった。

WORLD PEACE YOUTH CULTURE FESTIVAL

イタリアでの文化祭に出演!!

昨年の6月5日イタリア・ミラノの由緒あるリリコ劇場において第十二回世界青年平和文化祭が行われ、世界のアーチスト達と共に出演した感動は今も昨日の様に蘇って来る。

イタリアのマッツィーニ女史の総督監による映像と舞台を「翼」という奥深いテーマでドラマティックにつづりながら大胆に展開する流れは感動の渦となって劇場が一つの大船が揺れるかの様に感じられた。

その中で日本の場面の「飛翔」を畑代表が振付、出演し、「人間革命」をソロで踊り多くの人々から感動の声がよせられた。又、とくに人気のあったのは太鼓と太鼓踊りで女性の群舞の美しさと男性の勇壮さにひときわ拍手が湧いた。ラストは合唱団がヴェルディの歌劇「ナブッコ」の名曲を心をこめて歌った。百人近い人々がイタリア各地から集い、その日始めて一緒に歌ったとは思えない素晴しさで人々の胸を打った。

フィナーレは圧巻で池田SGI会長夫妻が世界的サッカー選手バッジョ夫妻と共に、皆に応えて登場。演じる側と観る側の生命がはじける様に爆発、おそらく参加者全員が始めて経験したと思われる歓喜の渦となって繰り広げられた。